

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 304 回 「野球」が「ベースボール」に勝った日！

2009.3.29

先週の火曜日、つまりWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)決勝戦の日である。事務所の私の部屋は、密かにTBSテレビの音声を流しつつ、仕事にならなかった。多くのビジネスマンが仕事をサボったに違いないこの日。結果は最高の形で終わり、久々に、心底から歓喜の雄叫びが日本中に響き渡った、そんな、記念すべき一日だった。

野球なんぞ、馬鹿馬鹿しい...と一笑に付してはならない。関西大の宮本勝浩教授(理論経済学)は、WBCで日本代表が優勝した場合の経済効果を発表している。その試算によると、宮崎合宿の効果が観客の交通費、飲食費などで53億円。大会前の強化試合と、東京で行われる1次ラウンドの入場料収入、交通費などが106億円。米国である2次ラウンド以降の観戦ツアーに15億円。放映権料やグッズの売り上げを合わせると直接的な効果が計226億円で、波及効果を合わせると約506億円に上るといふ。(出典 <http://www.asahi.com/sports/special/wbc/OSK200902270052.html>)

「100年に1度の不況」と言われるこのタイミングで、内需500億円は結構大きい。経済効果があるということは、消費者の財布のヒモが緩むということで、消費者心理も明るくなっている。国民的スポーツ「野球」の持つ影響力の凄さが、経済的にも証明される事実である。

そして、仕事をサボったのが小生一人ではなかったこと、証明する...テレビ視聴率である。24日にTBS系で放送されたWBC決勝「日本 - 韓国」の平均視聴率が36.4%(関東地区)を記録したことが25日、ビデオリサーチから発表された。「瞬間最高視聴率」は9回裏2死から、リリーフのダルビッシュが同点打を打たれた瞬間の45.6%。ゲームセットの瞬間は44.5%を記録した。また、同時時間帯のテレビ視聴世帯がどれだけその番組を見ていたかの目安になる「番組視聴占拠率」は71.7%(関西75.8%)を記録、なんと、テレビをつけていた家庭の4軒に3軒近くがWBCを見ていた計算になる。

そして、今回の「番組視聴占拠率」はスポーツ分野のみならず、昨年のNHK紅白歌合戦(47.8%)などを超える、08年度最高率となった。TBSは、第2ラウンド以降に日本が進む可能性のあった試合の放送権を-1試合2億円-で獲得したとされる。途中敗退も想定されただけに、いわば大きな賭けだったが、最良の結果になった。(出典:日刊スポーツ、スポーツニッポン等)

更に、余計なことだが、最悪の結果に泣いている人もいる、星野仙一である。星野氏といえば、昨夏の北京五輪に日本代表を率いて臨み、「金メダルしかいない」と豪語しておきながら、屈辱の4位。メダルも獲れないという惨敗に加え、言い訳のオンパレードで大バッシングを浴びた。それでも、球界の人材難や持ち前の政治力で、一時は今回のWBC日本監督就任を内定、あるいは次期巨人監督候補など、球界において絶大なパワーを誇っていた。今回原氏が世界一監督になったことで、今後、星野氏が球界を牛耳る立場となる可能性はほぼ消滅した。プロ野球界に君臨しようとした星野仙一を一気に飛び越え、主流は「原世代」、その幕開けの日でもあった。(出典:夕刊フジ)

しかし一番の効果は、無気力と言われる若い世代に、侍ジャパンの「ひたむきに頑張ることこそ結果はついてくる」という姿勢をアピールできたことだと思っている。その結果、日本の「野球」が本家「ベースボール」に勝ったこと、至難も克服できるというこの事実を、若い世代が身体で感じ、奮い立ってくれることこそが、日本の将来を明るくする、何よりの効果なのかもしれない。